
ポストの中にコピト

藤村阿智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポストの中にゴビート

【著者名】

N5722B

【作者名】

藤村阿智

【あらすじ】

郵便受けのなかにゴビトが住み着いた。なんとか出て行つてもらおうと説得を試みるが……短編。

近頃、物騒な世の中で、重要な郵便物を狙つた盗難が多発しているらしい。

確かに個人情報満載の請求書や背番号やらが届いているので、僕もアパートの集合ポストにカギをかけることにした。

ところが、なれないうちは非常に不便で、カギを開けるのに手間取ってしまう。ようやくカギをはずして中をのぞいたのに、何も郵便物が来ていなかつたなんてことはざらだ。仕事から、暗くなつたころ帰つてくるので、ポストの窓から覗いても中身がわからないのだ。

ちょっと手先が器用な僕は、スイッチを押せば電気がポストの中を照らす仕掛けを作つた。これが思つていたよりずっと便利で、ポストの中がバツチリ確認できるのだ。まるで箱庭 「箱部屋」と呼ぶべきか、をのぞいているような気すらする。

こうなつてくるとさらに工作腕がうずくといふか、より部屋に立ち上げたくなつてしまつた。僕は小さな机をポストの中に置き、小さなイスを置き、ソファを置き、絨毯を敷いた。少しづつ、子供の頃あこがれた西洋風の部屋が出来上がつていつた。

ある日、僕が仕事から帰つてくると、僕のポストから光が漏れていた。

あれ、昨日消すのを忘れちゃつたのかな。とりあえず中を覗いてみると、ポストの中のイスに小さな人形がいた。模型なんかおいた覚えはない。僕が不思議に思つて、人形をつまむと、そいつは人形よりぐにゅつとやわらかく、しかもバタバタと暴れだしたのだ！

「はなしてくれ！ はなしてくれ！」

人形が騒ぐので、僕はそつと手をはなした。これは人形じゃない、ゴビトだ。身長4・5cmぐらい、男、群青のスーツと白いシャツ。

上着はイスにかけてあった。

「キミ、人が部屋でくつろいでいるのに、いきなり挨拶もなしにつまみ上げることはないだろう、礼儀を知らない人だな」

「ゴビトは静かに、でもきつい口調で僕をたしなめた。一瞬、申し訳ないことをしたような気持になつたが、すぐ目を覚まし、

「そんなことより、僕のポストになんて棲んでいるんだ。そのほうがあおかしいじゃないか。百歩ゆずつて、ゴビトがいる」とは認めるけど、何も僕のポストに棲むことはない」

とゴビトに詰め寄つた。ゴビトは僕の大きな声に耳をふたきながら、部屋のほうに顔を向けてしまつた。

「ここは良く出来ている。ゴビト仲間が作る家具よりずっとついやすいし、光も明るい」

ゴビトが本当に気に入つたような表情で、部屋の中を見回していた。小さな顔だけど、表情が豊かなので感情がよく伝わってくる。僕は、自分が作った物をほめられて少し嬉しくなつたが、

「とにかく、ここに棲まれたら僕は困るんだ。家具はあげるから出て行つてくれ」

とゴビトにもう一度、ゆつくり、あまり大きな声にならないよう伝えた。

「せつかちな人だな、とにかく座りたまえ」

ゴビトがイスをひくので、「座れるわけがないだろ」と「冗談をさえぎつた。

「冗談にも笑つてくれないなんて、無粋な人間だな。昼ごろだつていきなり部屋の中に白い板を突つ込んできた人間がいたし

「それは僕宛の郵便じゃないか?どこへやつた?」

「板は、案外軽かったから外へ押しやつたよ。」

ゴビトがそういうので、ポストの下へ目をやると、一枚のハガキが落ちていた。DMだから良かつたものの、これじゃこれからも困るなあ。

「困るよ、これは僕宛の手紙だ。この箱はね、僕宛の手紙が来ると

ころなんだ。

手紙が届かなくなつたら困るんだよ

僕がコビトに、少しそうするような態度でお願いをすると、「コビトはアホで腕組をして考え込んでしまつた。

「あい、わかつた。」

「コビトが、わかつたといつ表情をして僕のまつを見た。よひやく出て行つてもらえたと僕は安心したが、

「私がキミ宛に、毎日手紙を書くから。ここに私が住んでいても、キミに手紙は毎日届く。これでいいだろ?」「満面の笑顔でコビトがそういうものだから、僕はもうなにも言つて返せなくなつて、

「それじゃあ、お願ひします」

と言つてしまつた。

管理人に事情を説明して、空いているポストに部屋番号を貼り付けて、そこへ郵便を届けてもらつことになつた。

最終的には何の問題もない。

相変わらず、ポストにコビトは棲んでいて、毎日きちんと僕宛の手紙を書いている。彼なりには大きく書いてあるだらう文字も、僕には虫眼鏡でようやつと見えるような大きさだ。苦労して読んでも、「元気ですか、ここは快適ですね」とか、「タンスを作つてください」とか、他愛もない内容なのだ。

あ、そうそう、今日の手紙は面白かった。あきれでヘンな笑いしか出なかつたよ。

「私が仕事に行つてゐる間に、誰かが部屋へ侵入すると困りますので、部屋にカギをつけてください。最近物騒ですから」

(2002/11/5作品)

(後書き)

- ・ショートショート集「ブラックドウワ」には約200の短編を掲載中です。

<http://www.blackstrawberry.net/blackdown.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5722b/>

ポストの中にコピト

2011年1月15日21時54分発行